

～ 金沢小学校・市谷小学校 ふるさと交流推進事業 ～

1. 交流事業の契機

昭和 62 年 6 月、東京都新宿区立市谷小学校の教員が、食文化・伝統に関する教材開発を進めるため、餅米の産地である花泉町の餅文化の調査を実施するため、花泉町立金沢小学校を訪問した。このことが縁となって、両校の社会科の授業として「餅文化と稲作」をテーマとした研究が進められることとなった。(この研究成果は、岩手の農と食を見直す絵本「どうしてもちをたくさん食べるの(農山漁村文化協会刊)」により、広く紹介されることとなる。)

相互での研究が進むなか、情報交換だけではなく、両校児童の作品や手紙の交換が行われるようになった。その後、互いの生活や文化を実際に体験させたいとの気運が盛り上がり、昭和 63 年 8 月に市谷小学校の児童 9 名が金沢小学



イワナつかみのあと塩焼きし、楽しい昼食

校を訪問、翌年 3 月には金沢小学校の児童 17 名が市谷小学校を訪問し、両校児童の相互交流が始まった。以来、夏に花泉町で、翌春に東京での交流が始まり、今年で 11 回を数えるまでとなった。

2. 交流事業の経過・概要

初回の訪問を機に市谷小学校 P T A では、交流事業についての共通理解を深めるとともに、その必要性について等活発な話し合いをもつことにより、P T A 事業としての位置づけを徐々に高めていく事となった。開始時には有志により展開していた交流を、P T A の主要事業に位置づけ、交流委員会を組織し運営にあたるまでとなった。このような背景もあり交流参加者も年々増加し、今年は過去最高の 47 名が花泉町を訪問することとなった(市谷小学校では、毎年定員を上回る希望者のため、抽選により参加者の決定を行っている)。

一方の金沢小学校では、5 学年 P T A が中心となって実行委員会を組織し、交流の運営にあっている。市谷小学校への訪問は 5 学年児童全員(30 名程度)が参加し、都会生活の体験をしている。

交流事業の内容については、花泉町訪問では児童宅のホームステイを中心とした田舎体験を実施し、2 泊 3 日の日程で餅つきや野菜収穫、魚つかみやキャンプなど花泉の夏を過ごしている。また市谷訪問は、同様にホームステイをしながら東京ドームでのナイター観戦や大手企業訪問等都内の施設見学をおこなっている。

どちらの訪問もホームステイを中心とし、児童と児童、家族、そして地域とのふれあいを中

心とした交流事業となっている。

3．交流事業の効果

子供たちについての効果としては、お互いの



市谷小の児童が「御神楽」を踊る

地域の様子を見、そして生活体験をすることで、自分たちが住んでいる地域についての良いところ、悪いところ等多様な観点で感じていることがあげられる。特に金沢小学校の児童にとっては、空気や緑、星空等日頃何気なく過ごしていることについて、都会の子供たちから言われて初めて自信を持ったことの意義は深いものがあると言える。

また、今年は10周年を記念して「緑と光の町へ」という交流のテーマソングが、両校関係者の作詞作曲により出来上がった。このことは、離れていても同じ気持ちの歌を歌うという交流の原点ともいえる事であり、今後の末永い交流により、両校の発展に大きく寄与するものと評価されるものである。

地域レベルでの効果としては、市谷小学校開校50周年記念行事で花泉町の農産物の販売を行なったのを契機に、その後もPTA行事等での継続的な特産品販売が要請される等新たな

交流に展開しつつあるところである。

また、ホームステイで交流した家族同士がその後も継続的に交流を深めるなど、子供たちの交流を通じて家族や地域間の交流にまで展開している。

4．交流事業の問題点と今後の展望

この交流も平成10年度で11回目を迎え、事業の効果について両校関係者は大いに評価していることから、今後の交流の継続について前向きに検討されていると思われる。

しかし、これまでの運営方法での交流継続には種々の問題点が指摘されている。特に手づくりの交流による経済的負担、そして、ホームステイ受け入れに要する労力についての軽減がもっとも必要となっている。このことは両校でも認識が一致しており、無理をせず息切れのない自然体での交流形態が模索されているところである。

また、新たな取り組みとして交流児童OB（第1期交流事業参加児童が現在では22歳前後に）の再訪問の機会の模索、米や野菜などの農産物の産直も検討されるなど学校だけでなく地域全体を巻き込んだ交流の展開により、過疎地域の活性化が大きく期待されているところである。